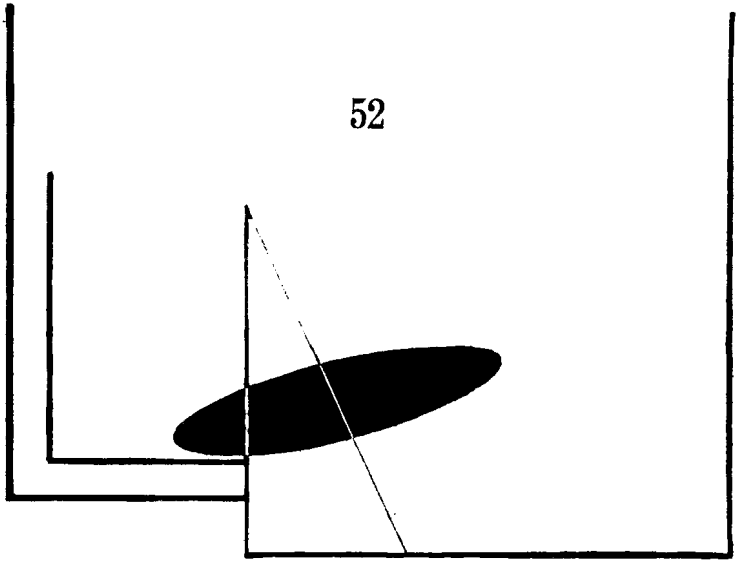
民榮肇
兆
江杉上
中大河

集

52



筑摩書房版

現代日本文學全集 52

中江兆民
大杉榮
河上肇 集

昭和三十二年四月十五日 印刷
昭和三十二年四月二十日 發行

著者 中江兆民 大杉榮 河上肇

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都千代田區飯田町一ノ二三
印刷者 中内佐光

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
電話 (29) 七六五一(代表)—五番
振替 東京一六五七六八

製本 美行製本有限會社
印刷 瞻印刷株式會社
整版 株式會社精興社

中江兆民集　目次

一年有半……五
續一年有半……二六

大杉榮集　目次

自敍傳……四七
日本脫出記……一三五

河上肇集　目次

自畫像……一八五
（附一）勞農黨解消後地下に入るまで……三〇〇
（附二）儚かりし地下時代……三四九
旅人……三八二

中江兆民の生涯と民權運動（小島祐馬）……三九五
大杉榮の生活と思想（江口　渙）……四〇六
河上肇論（壽岳文章）……四一一
解　說……四一六
年　譜……四二一

裝幀　恩地孝四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

中江兆民集

踐燈之時已深月未
窗明、梅影夢半覺
隱生之[illegible]吟

明治三十四年青山新[illegible]
皆有意書記未必甚佳題例
[illegible]紙之時是書法[illegible]
[illegible]

[illegible]

一年有半（生前の遺稿）

第一

一年半の來由

○明治三十四年三月二十二日東京出發、翌二十三日大阪に着したり、二三友人停車場に來り迎へ、余が顏を熟視し大に驚きて、余が或は直に卒倒せざるやと迄に思ひたると、旅館に着したる後に言へり、宜なり余は去年十一月より頻に咳嗽を患ひ、當時咽喉專門の醫の診斷には、普通の喉頭加答兒なる旨に付き、爾來打棄置きたるに喉頭漸く疼痛を覺え、飲食共に半減せる中、夜汽車にて來りしが故に、斯くは疲勞を現したるなる可し、然れども此時余は矢張慢性喉頭加答兒位に考へて打棄置き、四月紀州和歌の浦に赴き游ぶこと四五日、然るに此時よりソロ〳〵呼吸微促を覺え、喉痛依然たるを以て、余の素人と雖も少く氣を遣ひ、或は世に所謂癌腫なる者に非ざる耶と、因て行李匆々大阪に歸へり、耳鼻咽喉專門醫堀內某の診斷を請へり、醫例に依り光線を利用して、仔細檢視して曰く、是れ切開を要すと、余是に於て果して癌腫なりと察し、答て曰く、然らば請ふ一身を托して切開を施されんことを、既にして余の友人余の請によりて手術の證人たるを諾せし者、書面を余の留守許に發し詳細の事を告げり、妻彌〻大に驚き倉皇出發して下阪し來り、余の投宿せる中の島小塚に至れり、既にして衆皆癌腫切開の極めて危險にして、九死中一生無し、寧ろ維持策を取るに如かざるを謂ひ、余を尼めて已まず、余固より好みて死を速にせんと欲するに非ず、一息の存する必ず爲す可き有り、亦樂む可き有るを知るが故に、癌腫切開の方は思ひ止まれり、而して堀內も敢て强ひず、矢張危險と考へたりと見ゆ

壽命の豐年

○余一日堀內を訪ひ、豫め諱むこと無く明言し呉れんことを請ひ、因て是より愈々臨終に至る迄猶ほ幾何日月有る可きを問ふ、即ち此間に爲す可き事と又樂む可き事と有るが故に、一日たりとも多く利用せんと欲するが故に、斯く問ふて今後の心得を爲さんと思へり、堀內醫は極めて無害の長者なり、沈思二三分にして極めて言ひ惡くさうに曰く、一年半、善く養生すれば二年を保す可しと、余曰く余は高々五六ケ月ならんと思ひしに、一年とは余の爲めには壽命の豐年なりと、此書題して一年有半と曰ふは是れが爲め也

一年半は悠久也

○一年半、諸君は短促なりと曰はん、余は極て悠久なりと曰ふ、若し短と曰はんと欲せば、十年も短なり、五十年も短なり、百年も短なり、夫れ生時限り有りて死後限り無し、限り有るを以て限り無きに比す短には非ざる也、始より無き也、若し爲す有りて且つ樂むに於ては、一年半是れ優に利用するに足らずや、嗚呼所謂一年半も無也、五十年百年も無也、即ち我儕は是れ、虛無海上一虛舟

○斯く一年半てふ、死刑の宣告を受けて以來、余の日々樂とする所は何事ぞ、旅の身なれば書籍とても無く、先づ差當り當地の朝日、每日の

世界との交際

兩新聞と兼て愛讀し來れる、東京の萬朝報とを讀む事也、即ち此三新聞に由りて余の世界との交際を繼續する事也、此間伊藤內閣倒れて、桂內閣之れに紹て興れり、極めて微弱なる立憲內閣、否立憲內閣の幻影消散して、超然內閣勃興せり、桂內閣なる者は其成立したる丈けにて世の立憲政治家に向ふての、宣戰布告と謂ふ可し、

超然の怪物彈冠し笑ふ

○星亨、健在なりや、犬養毅、健在なりや、民間政治家一たび利を目的とし、權勢を目的とし、成效を目的とせし以來は彼れ超然の怪物相共に、冠を彈じて笑ふて曰く、民間黨畏るゝに足らず、

コルベールの時代

○伊藤大隈のリヴアリテーの時代は去りて、伊藤山縣のリヴアリテー時代と成れり、民間意氣の銷沈實に是に至る、而して其原因は財無きに苦むに在り、余故に曰く、今の日本はコルベールの時代也、

マンチエスター派の賜

○余是迄新聞に雜誌に時々曰へり、「マンチエスター」派經濟論は日本官民上下を毒せしこと久し、即ち自由放任の經濟主義明治政府と共に發展して其力

を逞しくし、今や經濟界の附屬品たる交通運輸の機關は日々に具備して、而して此等機關を利用す可き主要品たる產物は、三十餘年以來幾何の增殖を見ず、車輛有りて積貨無し、是れ我邦今日の經濟界也、是れマンチエスター派經濟論の賜也

國民何くに適歸せん

○官民上下貧に苦しむ、是に於て乎凡そ施爲皆姑息是れ事とし、人情日々に菲薄にして、內閣は復た一國經綸の造出所には非ずして、箇々利慾を貪り權勢を弄ぶ最高等最便利の階段也、貴族院は陽に黨弊を矯正すると稱し、陰に機に乘じ己れ自ら內閣に割込む地を爲さんとして、强て攻擊を粧ふ險惡極まる物體の集合所也、衆議院とは何ぞ是れ復た言ふに及ばず、直ちに是れ餓虎の一團體なるのみ、夫れ一國政治の機關たる內閣、貴族院、衆議院の各團體にして、薦紳的野獸の淵叢なるに於ては、國民果して誰に適歸せん、コルベール出でゝ從橫裁割大に利源を開發し、官民上下をして財に饒ならしむるか、若くは自然の運移よりして此處猶尙多く年所を經て、コルベール大力量の效と同じき效を見得るに至るに非ざれば、我日本の政治經濟は竟に觀るに足らざる也、

越路太夫を聽く

○是より先余の大阪に來るや、曾て文樂座義太夫の極て面白きことを識りたるを以て、(余は春太夫(靱太夫を記憶せり)旅館主人を拉して文樂座に至る、越路太夫の合邦ケ辻呼物にて、其音聲の玲瓏、曲調の優美、桐竹、吉田の人形操使の巧なる、遠く余が十數年前に聞きし所に勝ること萬々、余素より義太夫を好む、然れども殊に大阪のものを好む、東京のものを好まず、東京の義太夫は大阪のものに比すれば一兒戲に値せざる也、其後又越路の天神記中寺子屋の段を聞き、忠臣藏七段に於て呂太夫平右衞門を代表し、津太夫由良之助を代表し、越路太夫於輕を代表して、所謂掛合ひに語り、更に越路太夫が九段目の於石となせの取遣りを語るを聞き、又明樂座に於て大隅太夫の千本櫻鮓屋の段を聞けり、夫れより四月二十日に妻來れるを以て復た共に文樂座に赴き、其後幾くも無くして又赴けり、故に此忠臣藏の淨瑠璃は妻は二度聽き、余は三度聽きて啻に厭はざるのみならず、愈々聽きて愈々面白味を感ぜり、巧なる證據なり、蓋し津太夫の狀貌並に其沈毅の音聲、重もくるしき洒落等、正に千五百石赤穗城代たる大石內藏之助其人を想はしむ、呂太夫の善く關東音を遣ひ、率直にして勇み膚なる卽ち平右衞門其人也、若夫れ越路の優美なる音聲と婀娜なる曲調とに至ては、於輕を摸寫する誰か之に近似し得る者ぞ、眞に是れ戲曲界の一偉觀と謂ふ可し、余既に三度此偉觀に接す、一年半決して促には非ざる也、孔聖云はずや朝に道を聞て夕に死すとも可也

戲曲界の一偉觀

○然と雖も所謂一年半も亦徐々歩を移し來れり、若し一歩も進むこと無ければ一年半に非ずして不老不死なるを得ん、卽ち余が喉頭の腫物漸次發達して大に呼吸の促迫を起し來り夜間安眠すること能はず、乃ち堀內醫師に謀る、此時余は妻及び友人の勸誘に由り、一たび東京に返り更に下阪せんかと思へり、堀內一診して曰く、是れ危險極まれり、若し此儘にて汽車に御せば途中必ず窒息す可し、之を防ぐには氣管切開の一法有るのみ、此れ極て見易き手術にて、氣管恰好の處に穴を穿ち、更に銀管を挿入し、以て呼吸に備ふる法也と、妻獨り疑惧して決せず、急に電信もて、余の從弟醫博士淺川範彥を呼び之れに謀る、範彥固より堀內と同案なり、更に當地傳染病研究所長石神某と共に立合人と成り、五月二十六日を以て堀內醫院に於て切開を施し了はりて、其前方なる淺尾某の一室を借りて療養を加ふる事と爲せり

氣管切開の一法あるのみ

○淺尾の家は今橋一丁目にて東橫堀に面し、右に高麗橋有り左に築地橋有り、更に前方卽ち東方に天神橋屹然として起り、夜間兩岸の燈火水に映して恍として純然たる水郭に居るの想有らしむ、是に於て每日堀內院長來診して創口を療し、余は平臥動くこと無く以て醫命に從へり、夫れ氣管切開術、小手術なるには相違なきも手術は手術にして、其初や相當疼痛を覺へ、而して今後咳嗽する每に、痰口より出でずして胸より出づ、而して聲音全く嗄渴して些の反響なく、僅に近接して談話を便するのみ、果然余は一種の不具者と成り了はれり、而して是れ根本的治療には非ずして唯夫の一

果然不具者と成る

年半を迎ふる間、窒息して死するを豫防するに過ぎざるのみ

○氣管切開の事、京阪間に傳へられてより、書翰日々輻湊して手術後經過の狀を問ひ來るものには、余妻をして經過極て良好なりと報ぜしむ、而して世人多くは病榻に於ける氣管切開の何物たるを省せず、直ちに認めて根本的切開と爲し、更に書を發して大に祝賀し來る者比々皆是れ也、所謂一年半は唯だ余と妻と之を知るのみ、即ち東京來書中二兒の葉書若くは封書有り、云ふ、父上御病氣追々快復云々と、此處父親たる余に於て聊かストイツク的哲學の工夫を把り來りて、自ら防がざる可らず、人間も亦愚痴なる動物なる哉、呵々

聊か哲理的工夫を要す

○余が妻は、余が豫め患ひしよりは意外に哲學的にて、夫の一年半に於て絶て苦情を言はず、全然余の旨趣を採り務めて目前を樂しみ、以て自ら慰藉せしと見え、今此病院に居るも、何と無く陽氣にて宛然溫泉場に出養生しつゝ有るが如く、うつら〳〵日を送り其中創口も全く癒着し、唯だ咳嗽未だ去らざるのみ、因て六月十八日出院して再び中の島小塚旅館に歸れり

溫泉場の出養生

○是より先、未だ入院せざる前、余妻を携へて堀江なる明樂座に往き大隅太夫の淨瑠璃を聽く、妻が大隅を聽く是れを始めとす、大隅は名人故春太夫の弟子にして春太夫歿後之れが三絃を任し居たる古今無雙と稱せられし豐澤團平に從ひ、同人に其神品とも云ふ可き三絃を以て引廻はされ、自然に故春太夫の音節の蘊奥を極むることを得たりと云ふ、殊に近頃流行の壺坂寺の如きは團平實に開山にして、之を大隅に傳へたるが故に、殆ど今日に在りて大隅太夫の專賣とも云ふ可し、余出院して小塚へ歸るや、明樂座夫の三十三所の題目を掲げ、壺坂寺の段は大隅太夫之れを語ることと成り、毎日大入なりと聞けり

團平と大隅太夫

大隅太夫の壺坂

○斯くの如くに壺坂寺の段は、大隅太夫の十八番とも云ふ可き者にて、爲めに大入を占むる、是非一往せざる可らず、乃ち一日妻と共に往けり、夫れ明樂座は人形と云ひ、人形遣と云ひ、到底文樂座の功妙に及ばず、其他道具と云ひ總て及ばず、然るに午後二時三時の比より客衆續々詰懸け來り、遂に場内立錐の地を留めざる者は、此輩全く其以前の太夫を眼底に置かず、唯大隅一人を聞くが爲めに斯くは雜踏し來る也、此れを以て言へば大隅一人にて優に文樂座の向を張り居れると謂ふ可し

○三十三所靈驗、順次段を逐て了はれり、竟に壺坂寺の段に至れり、序幕は春子太夫影にて語り去り、既にして大隅太夫其相撲然たる肥大の體を揭げ來り、やがて彼の有名なる法師歌「夢が浮世か浮世が夢か」を唄ひ出し曩々絶へんと欲して絶へず、其澤市と里との噺の如き直ちに其人を現出したる如く、此間に大隅太夫無き也、嗚呼技此に至りて神なり、是れ淨瑠璃か、是れ噺耶、是れ活劇耶、他人の淨瑠璃は淨瑠璃なり、大隅の淨瑠璃は事實其物也、且つ彼れは故さらに拍手喝采を博せんと欲するが如き態絶て無く、唯自ら語り自ら研究して、自ら滿足し自ら樂むが如き所、眞に高尚上品にして、到底他碌々たる者と比す可きに非ず、嗚呼是れ斯道の聖也

技此に至りて神なり

○六月二十一日夜、朝日新聞號外の摺物を送り來る、曰く、本日午後三時星亨東京市會に於て伊庭某の爲め刺されて即死せりと、余も亦驚きたり、是より二十六日葬儀を畢はるに至る迄、京阪新聞、毎日一二欄星暗殺事件の詳を載せざる莫し、所謂一國如狂もの耶、何ぞ我邦人の輕浮にして沈重の態に乏しき耶、生ける星は追剝盜賊にして、死せる星は偉人傑士なり、是非毀譽の常無き一に此に至る、伊庭某余一面の識有り、名を想太郎と云ふ、極て溫厚沈重の人也、而して此擧に出づ、謂はれ無しと曰ふ可らず、但暗殺其事の善か惡か是れ言ふ迄も無し、刑法人を殺す猶ほ大に議す可き有りて、死刑を廢するの論各國に行はるゝ所以なり、況や人々相ひ殺すに於てをや

星亨と伊庭想太郎

○是故に暗殺は其是非を論ず可きに非ずして、唯其國社會に於て果して暗殺の必要を生じたること、是れ甚哀しむ可き也、人或は勢に乘じて鴟張して忌憚する所無し、其惡を恣にすること明かなるも、法律の公に未だ把捉す可らず、彼れや自ら恃みて毫も顧みず、是に於て義に激する俠雄の徒起ちて天下の爲めに之を刺す、是れ洵に勢已むを得ざる也、伊庭の事、蓋し斯く信じたるのみ、此を以

暗殺は必要なり

て更に一歩を進めて之を論ぜば、文運大に開け法律用無くして、道德獨り力を逞しくして、乃ち一國人々皆君子なる曉は知らず、苟も社會の制裁力微弱なる時代に在ては、惡を懲らし禍を窒ぐに於て、暗殺蓋し必要缺く可らずと謂ふ可き耶

灰殼連の欺僞

○世には又一種の灰殼連と云ふ可き輩は、己れ文明人たる事を示めさんと欲し、無暗に同情を殺害者に表し、意を狂げて奬賛媚悅し、加害者は則ち直ちに兇漢を以て之を目して、以て自家の文明溫和の人たるを衒耀し、其夷情を問へば或は正に之れと反對にて、心竊に此事件を快とせる者多々なるを知る、欺僞の世の中なる哉、教育の如きは要當さに根本より革む可き也

○六月二十九日、東京文部省にて、法理醫文諸科に於て博士號を授かりし者三十許名、余の從弟淺川範彥も亦醫博學士の號を授く、範彥篤學衆に絕す、北里後藤諸醫伯夙に藻鑒する所有り、其始めて笈を負ふて東京に來るや、余が家に寓すること數月、余之れに謂て曰く、大丈夫既に一科の學に從事す、必ず一二創見する所有り、以て其社會及び後世に賜賚する有る可し、ニウトンの引力に於ける、ラウオアジエーの酸素に於ける、正に赫々人耳目を照す者也、然らずして唯書物にて學びたるのみにて、其頭腦中唯古人の言語を記憶するに過ぎざれば、

範彥は吳服屋の帳面に非ず

吳服屋の帳面と一般ならん、何の學士か之れ有らん、何の博士か之れ有らん、大丈夫一たび此地球上に生る必ず之れに一大爪痕を印す可きのみと、範彥深く以て然りと爲す、今回博士の學位を得たるは、正に細菌學に就て大に創見せし所有りしが爲め也、果然範彥は吳服屋の帳面に非ず、呵々

○夫れ其能く創見する所有るを得るは何ぞ、其人學術衆に拔く有るに由ると雖も、抑も亦眞面目なるに由らずんばあらず、彼れニユートンや、ラウオアジエーや、極めて正經の人也、極て眞面目の人也、人或はニユートンに問ふに、何を以て能く爾かく大發見有ることを得たると、ニユートン答て曰く、我唯思ふて已まず故に得たり、其心胸面目如何なる人たるを知る可きに非ずや、是れ小才識小學術有りて、俗に所謂橫着なる、俗に所謂ヅウ〳〵しき小人輩の企及す可き所ならん哉、今や我邦中產以上の人物は、皆橫着の標本也、ヅウ〳〵しき小人の模範也、余近時に於て眞面目なる人物、橫着ならざる人物、ヅウ〳〵しからざる人物唯兩人を見たり、曰く井上毅、曰く白根專一、

井上、白根今則ち亡し

今や則ち亡し

○古今東西の歷史を看よ、興國の人は皆眞面目也、衰國の人、亡國の人は皆不眞面目也、希臘羅馬の末年に論勿く、卽ち一千七百八十年佛蘭西革命前を看よ、如何に人々不眞面目なりしか、

ロベスピエール現出せんとす

朝野の一出來事や、一戰役や皆被むらすに綽名を以てして、以て之を詬罵せざるなし、橫流の極、遂に天下古今の最も悲慘なる、最も滑稽なるロベスピエール輩を出して、此不眞面目なる一輩の徒を掩殺し盡して已めり、人事的論理の違はざる、此に至りて實に畏る可し

日本に哲學なし

○我日本古より今に至る迄哲學無し、本居平田の徒は古陵を探り、古辭を修むる一種の考古家に過ぎず、天地性命の理に至ては瞢焉たり、仁齋徂徠の徒、經說に就き新意を出せしことあるも、要、經學者たるのみ、唯佛教僧中創意を發して、開山作佛の功を遂げたるもの無きに非ざるも、是れ終に宗教家範圍の事にて、純然たる哲學に非ず、近日は加藤某、井上某、自ら標榜して哲學家と爲し、世人も亦或は之を許すと雖も、其實は己れが學習せし所の泰西某々の論說を其儘に輸入し、所謂崑崙に箇の棗を呑めるもの、哲學者と稱するに足らず、夫れ哲學の效未だ必ずしも人耳目に較著なるものに非ず、卽ち貿易の順逆、金融の緩漫、工商業の振不振等、哲學に於て何の關係無きに似たるも、抑も國に哲學無き、恰も床の間に懸物無きが如く、其國の品位を劣にするは免る可らず、カントやデカルトや實に獨佛の誇也、二國床の間の懸物也、二國人民の品位に於て自ら關係無きを得ず、是れ閑是非にして閑是非に非ず、哲學無き人民は、何事を爲すも深遠の意無くして、淺薄を免れず

○我邦人之を海外諸國に視るに、極めて事理に明に、善く時の必要に從ひ推移して、絕て頑固の態無し、是れ我歷史に西洋諸國の如く、悲慘にして愚冥なる宗教の爭ひ無き所以也、明治中

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

興の業、殆ど刃に衂らずして成り、三百諸侯先を爭うて土地政權を納上し遲疑せざる所以也、舊來の風習を一變して之を洋風に改めて、絕て顧藉せざる所以也、而して其浮躁輕薄の大病根も、亦正に此に在り、其薄志弱行の大病根も、亦正に此に在り、其獨造の哲學無く、政治に於て主義無く、黨爭に於て繼續無き、其因實に此に在り、此れ一種小怜悧、小巧智にして、而して偉業を建立するに不適當なる所以也、極めて常識に富める民也、常識以上に挺出することは到底望む可らざる也、亟かに教育の根本を改革して、死學者よりも活人民を打出するに務むるを要するは、此れが爲めのみ

總ての病根此に在り

經國の二大方針

○今の日本を大體此儘に成し置き、漸次改正を加へて進み將ち往く可き耶、將た亟かに大革新して一の歐羅巴國と爲す可き耶、是れ今日國柄を秉る者の最も首に胸中に決せざる可からざる事也、是れ豫算に苦しみ、對議會に窘しみ、閣僚の統一に盡瘁して、其他一歩も餘地を留めざる底の侯伯者流に在て、到底夢想し能はざる所以也

世界のルーマニヤ

○東洋大陸の事は余之を言ふを欲せず、事外交に渉り且つ目下に在るを以て、言はずして行ふを要す、唯だ我日本は當さに自己の天職如何と省覺す可きのみ、自己百年の運命如何と考慮す可きのみ、世界のルーマニヤと成ること勿くんば幸ひ也

○七月四日、大阪中の島小塚旅館を辭し去り、妻と共に堺市に赴く、是より先き去る三十三年春、余堺の友人某々等並に技師大上某の請を容れ大阪に來り、大上連年思を覃し力を殫して辛うじて好成績を得るに至りたる練炭製造の業を創するが爲め、砲兵工廠に請ふて更に化學的試驗を爲さんとす、余素より提理太田某と善きを以て、余爲めに斡旋の勞を取り、試驗成績極めて良好にして同人皆大に喜び、其後堺市の町に於て事務所を設け、合名若くは合資の一會社を組織せんとす、是に至り大上等余に勸むるに、該事務所に於て疾を養ふことを以てす、余已に久しく小塚旅館に居り、稍や意に倦む有るを以て、直ちに堺人の勸に從ひ事務所に來れり、宅甚だ宏ならずと雖も、構築整然として庭園頗る觀る可く、大氣極めて清涼なり、唯此一事既に以て一切他事を贖うて餘有るに足る、況や主人大上、其他共に煉炭事業に從事して此に居る者、皆洒然無害の長者なるをや

堺市に移る

政友會の運命

○政友會、星死して落寞の感を免れず、然れども政友會の重なる部分を爲せる自由黨は、歷史古く地盤固く、且つ彼輩深くベンタム的利己學の實驗に得る所有りて、唯だ利祿是れ圖りて、復た人間羞恥の事有るを知らず、故に今後とても決して分裂等の憂有る可らず、小波瀾は或は有る可し、小內訌は或は有る可し、各派の競爭は或は有る可し、然れども政友會の力は正に其大政黨たる所の處に存して、分裂すれば雙方共に損有りて益無きが故に、所謂內訌もキワドき所に至れば自然に已みて、相共に利を圖り害を避くることを是れ務めて、他念無かる可し、而して世の利益一方に志すの徒は、漸次に之に赴く可く、此處兎に角遽に衰滅に歸するには至らざる可し、但其內容を爲す所の人物は、大勳位を首とし他總務連中に至る迄、無氣力、無志慨の人々なるを以て、唯だ蠢蠢然相蕩撼し、嘗々然歲月を空過して、既に國に益無く、亦大に己れに利するに至らずして、久しきを經て雲散霧消す可し、吁是れ政友會の運命也、夫れ或は周に繼ぐ者百世と雖も知る可き也、吼夫子我を欺かず

伊藤侯は下手の魚釣り

○大勳位は誠に翩々たる好才子也、其漢學は悪詩を作る丈けの資本有り、其洋學は目錄を暗記する丈けの下地有り、是れ既に大に他の元老を凌轢して後に無語ならしむるに足る、加之口辯ありて一時を糊塗するに餘有り、然れども是れ要するに記室の才也、翰林の能也、宰相者の資に非ず、故に法律制度に關しては、前後常に若干の功有り、總理大臣と爲るに及ては、唯だ失敗有るのみにて一の成績無し、其器に非ざるを知る可し、故に侯の總理と爲りて企圖する所を觀るに、宛然下手の釣魚者也、船より竿より餌より絲より、百事具備するを待ちて始めて手を下すも、魚は一も得ること能はず、有名なる行政刷新、財政整理、皆下手の魚釣に非ずや、一言之を斷ずれば野心餘り有りて贍識足らず、內閣書記官長に止まらしめば、正に其所を得たらん也

早稲田伯愛す可し

○早稲田伯、壯快愛す可し、然れども亦宰相の材に非ず、目前の智に富みて後日の慮に乏し、故に百敗有りて一成無し、野に在て相場師たらしめば、正に其材を竭すことを得可し、蓋し糸平、阿部彦の雄是れのみ

餘の元老筆を汙すに足らず

○山縣は小黠、松方は至愚、西郷は怯懦、餘の元老は筆を汙すに足る者莫し、伊藤以下皆死し去ること一日早ければ、一日國家の益と成る可し

○自由黨が其抑鬱困頓流離艱難の歴史を一棄して、自ら伊藤に獻じて少しも貴重顧藉せず、而して伊藤とは何者ぞ、正に往年自由黨をして抑鬱困頓流離艱難せしめたる所の張本にして、即ち當の敵たりしを思へば、我れ自由黨諸子の度量に服せざるを得ず、抑も男子の氣節を奈何ん、彼れ唯利是れ視る、故に爲さざる所無し、故に其度量は大盡の愚弄に忍ぶ幇間の度量也

自由黨の大度量

○進歩黨、其無主義、無經綸は自由黨に同じくして、而して面皮の厚きこと遠く及ばず、着々之が後に落る所以也、自由黨先づ政府と提携して進歩黨之れに次ぐ、自由黨先づ積極を唱へて進歩黨之れに次ぐ、彼れ其れ衷情に愧ることを知る、故に遲疑して事に後る、其國家に益無きは則ち一也、其世俗に害有るは則ち一也

進歩黨の立後れ

○自由黨、其無主義、無經綸を以て、殆ど自ら標榜して隱さず、其利祿を圖るが如きは、自ら夸耀して得々たり、故に舊敵を恨みず新來を賤まず、其能く尨然大を成す所以也、其大を成すこと愈々甚しくして其風俗を傷ること愈甚し、是れ久しからしむ可らず、伊藤侯、其區々の宣言書を以て自由黨を矯正せんと欲す、自ら揣らざるの甚しと謂ふ可し、今や侯全く自由黨の親分と成り了はれりと、思ふに能く今の自由黨を矯正して之を規儀に納るゝ者は、必ずや釋迦、孔子以上の人物也、今の計を爲すには、他に一の政黨を作りて、天下の人心を收攬し、天下の義心を激揚し、其末や自由黨を擧げて之を排斥し、政界に齒せしめざるに在り、腐壞彼れの如く甚きは、復た濟度す可らず

宣言實行は釋迦孔子以上の仕事

○進歩黨は猶恥有り、故に其無主義を恥ぢて主義有るを爲し、其利を圖るを恥ぢて義に仗るを爲す、統領其人を得ば或は眞の政黨を成すに至らん歟

憾らくは其人なし

○御靈文樂座の人形遣に富めること久し、目今吉田玉造の男役に於ける、桐竹紋十郎の女形に於ける俱に神品也、而して玉造の男は團十郎に似たる有り、紋十郎の女は菊五郎に似、秀調に似て大に之れに優る、其神旺し手馳せて最も得意の候に及びては、人形の外絶て遣手を見ざらしむ、人形即ち人也、役者也、吁嗟、技の神なる也、

玉造と紋十郎の人形

文樂の三絶

○玉造、紋十郎は人形に於て、津太夫、越路太夫は淨瑠璃に於て、廣助、吉兵衛は三弦に於て、方に其神伎を騁す、所謂三絶也、文樂座狂言の天下に度越する所以也、

津太夫

○津太夫聲低して、七八合目以外に在る觀客は恐らくは一語も聞ゆる無くして、唯唇頭の動くを見るのみ、態度の變轉するを見るのみ、然れども津太夫一たび場に現はれば、滿座肅然として敢て讙譁する者無し、蓋し太夫意氣精神を以て語りて、聽衆も亦意氣精神を以て聽く也、若し二三合目の處に居て仔細に傾聽するときは、其音節の微妙にして高尚なる、態度の自然に出でて少しも無理と當込みと無きこと、老練の極と謂ふ可く、彫琢して璞に歸へるものと謂ふ可し

○越路音聲の美、曲調の巧、眞に匹儔無し、蓋し津太夫、呂太夫は、玉造の男形と相ひ待ち、越路太夫は紋十郎の女形と相ひ待ちて、俱に其妙を極むるを得、皆逸品也

廣助、吉兵衛

○豐澤團平死して、絃界落莫たるを免れず、廣助吉兵衛皆體を具へて、而して微なる者

濱寺の風景

○堺市、濱寺風景、甚佳なり、海濱松樹亂立して、其下縱横歩行して涼を取る可く、大に須磨及び東海道中、平塚に似たる有り、海汀一酒肆旅館を兼ぬる者一力と云ふ、構築頗る宏壯、欄に倚りて一望すれば、水天髣髴の際、神戸及び淡路を看取するを得、余一夕妻と俱に歩して海汀に至る、遇ま天雨を催し、黑雲西方を蔽ひ、波浪岸を拍ち、鞳鞳の聲、人をして或は意氣壯ならしめ、或は悽然哀を催さしむ、余既に不治の疾を獲て所謂一年半の宣告を受けて、而して妻日夜余に侍して藥餌の勞

を取るも、是れ固より治癒を求むるに非ずして、唯死期を待つのみ、余や男子、且つ頗る書を讀み理義を解する者、箇中又自ら樂地有りて、時時大疾の身に在るを忘るゝに至る、妻の如きは女性、近來頗る余の薫化を受け、快を目前に取るの術を得る有りと雖も、而かも余の如く自得

欲壙藁墨惟疎放、自笑狂夫老更狂

悠揚たる能はざるは自然の道理也、余固より產を治するに拙にして、家に逋債有りて貯財無し、而して斯重症に罹る、悲慘と云はゞ悲慘なり、此夕余笑ふて妻に謂て曰く、卿年已に四十餘、余死したる後ち復た再嫁の望有るに非ず、余と俱に水に投じて直ちに無事の鄉に赴かん乎如何と、兩人哄笑し、途中南瓜一顆と杏果一籠を買ふて寓に歸る、時に夜正に九時

○余は自殺死を排斥する者に非ず、但自殺は大に道德に背き、情義に反したる行ひ有るの後、

自殺論

自ら悔恨して措くこと能はざるの候、自殺して死を取り、以て罪過を懺悔するが如きは、必ずしも惡からず、金錢の爲め病氣の爲め等に原因して失望し、自殺を圖るが如きは是れ唯一味の惰弱のみ、且つ病氣羣に在るが如き、其中に亦自ら樂地無きに非ず、余が一年半の記述の如き正に是れのみ、

死後は永劫也

○人、七八十にして死せば長壽と云ふ可し、然れども死して以往は永劫無限也、七八十年を無限に比せば如何に短促なるぞ、是に於て乎彭祖を夭とし、武內宿禰を短命とせざるを得ず

莊周も未だ言ひ得ず

○兒生る、其生るゝの瞬間より卽ち徐ろに死しつつ有る也、何ぞや、其最長期たる七十八十に向ふて、進みて片時も休止すること無ければ、是れ徐ろに死しつつ有ると謂ふ可し、何の不可か之れ有らん

（七月十一日堺市に於て此稿を畢る）

第二

權略は惡字面に非ず

○權略、是れ決して惡字面に非ず、聖賢と雖も苟くも事を成さんと欲せば、權略必ず廢す可らず、權略とは手段也、方便也、但權略之を事に施す可し、之を人に施す可らず、正邪の別、唯此一着に存す、權略を事に施すとは、例へば大石良雄が始に城を背にして一を借らんと唱へ、中に殉死を唱へて、終に乃ち始めて其眞意を打明けて復讎を唱へたる是れなり、權略を人に施すとは、例へば戰國の時、詐りて敵と和し、敵將を誘ひ伏を設けて之を掩殺せしが如き、織田信長、明智光秀の屬、動もすれば此術を用ゐたり、是れ固より憎厭す可し、權略事に施すが如きは、多々益々善し、事を成す正に此に在り、是れ殆ど方法順序と曰はんが如き者

大政事家は誰ぞ

○佛のリセリユー、コルベール、チエール、英のピツト、ロバートピール、グラツドストン、獨のビスマーク、意のカヴール、支那の諸葛亮、曾國藩、我邦の德川家康、大久保利通、是等を大政事家と謂ふ、今の五等爵位の輩、此れ特に太陽の前の爝火のみ

大政事家の爲す所

○大政事家の爲す所は、一定の方向有り、動す可からざる順序有り、光明俊偉の觀有り、其言ふ所は卽ち其行ふ所にして、今や彼己氏が徒らに準備多く觸込み多くして、幽靈の足の如く輒ち消滅し去るが如くならず、而して聞く、彼己氏は則ち竊にビスマークを氣取りカヴールを氣取れりと、他日此二人に地下に逢はゞ、夫れ何の顏か之れに對せん、呵呵

大政事家は眞面目也

○大政事家は皆恐懼物若の狀有り、小心纏密の態有り、其衷情眞面目なるが故也、彼己氏が公々然姬姜に戲れ醇酒に酬し、浮薄なる幕賓を集めて大言壯語し、而して僅に一二敵抗する者あるに遇へば、意氣輒ち沮喪して、唯だ逃るゝことの早からざるを恐るゝが如くならず、呵々

秕販零商の徒

○輸出超過、輸入減退、正貨流入、物貨低落、輒ち曰く順境々々、秕販零商の徒、賣ること常に多くして、買ふこと常に寡し、財に乏しければ也、一國も亦此の如し、其輸入殆ど皆無なるが爲のみ、其正貨流入は購買力竭きて唯賣るを是れ事とするが爲めのみ、國の資富は物貨生產の力の大小如何に在り、我國今日の患は貨幣乏しきに存せずして、生產力劣なるに在り、此處經世家宜しく眼を着く可し

製造難

○製造業極めて難し、品質精良にして而かも價廉なるに非れば、以て市場に勝を制す可らず、物良にして價廉なるは科學に

依るの外無し、是に於て乎學術の普及を圖らざる可らず、物良にして價廉なるも未だ市場の勝を必す可らず、必ずや需用者の嗜好に投ぜざる可らず、是に於て乎販路なる地方の人情習尚を諳知せざる可らず、是くの如きは到底一時の奇利を僥倖とする株屋連の能く當る可き所に非ず

輸出難

○是故に輸出業は輸入業に比すれば大に難し、故に輸出業者に對しては、官宜しく相當の保護奬勵の法を設けて之を輔佐す可し、輸入業の如きは我邦人を相手とするものにて其嗜好は固より之を熟知し、其需用も亦同じく之を知れるが故に、百發百中失敗の憂殆ど絶無なり、是れ我邦の如き商業的未開の際に在りて、輸入商多くして輸出商寡き所以也、官に局に當る者此れ察せざる可らず、

百年の計別に在る有り

○近日官の唱ふる所の事業繰延と云ひ、公債支辨の事業と云ひ、皆當下を處理する所以にして、固より喫緊要務たり、然れども是元來已むを得ざる者にして、殆ど再思を須るず、若夫れ國家百年の計は別に自ら在る有り、當途者當さに目を着く可し、百年の計とは何ぞや、曰く卽ち前に論じたる生産力を增殖するの一事のみ

何ぞ墮落を怪まん

○衣食足而知榮辱、是れ中人以下皆然り、近日我邦上下人情浮薄、甚しきは墮落腐壞に至る所以の者は、詮じ來れば人皆阿堵物に短にして、自己の需用の幾分をも飽す能はざるに因らずんばあらず、夫れ窮して而して爲さゞる所有る者は、千百人乃ち一人のみ

文學の戰國時代

○今や我邦の文學は、殆ど戰國の時崩しの體有り、英雄割據の有樣に似たる有り、漢文體有り、飜譯(洋文)體有り、言文一致體有り、侍り島の體有り、各種雜用の體有り、惟ふに是等の諸體各短長有り、崇重典雅の樣を見はし、若くは悲壯慷慨の狀を寫すには、漢文崩し最適當なるを覺ゆ、委曲詳密透得十二分なるを求むるは、飜譯體若くは言文一致體に如くは莫し、優美の色彩を發するは、侍り島の體を長と爲す、故に此等諸體、今後時に其中に盛衰は有る可きも、消滅する者は無かる可し、又文字の如きも、漢字あり、假字中、草書伊呂波有り、片書伊呂波有り、萬葉有り、斯くの如く錯雜なる者は、恐くは古今何れの國にも無き所の例なり、是に於て乎文字改革の論有り、惟ふに時に政柄を秉る者、魯帝アレキジオウイツトの果斷有りて之を處せば、羅馬字最便利なる可し、之を爲すの方、先づ大中小字書を作り、次に巖谷漣の御とぎ噺の如きものを羅馬字もて編し、之を小學の豫課に加へ、中學大學其他適當の一二書を羅馬字もて綴りて豫課に入れ、以て學生をして習熟せしめ、此の如くして竟に官の公示論達の中にも入るゝに至らば、久しきを經て一變するを得可し、但斯く文字を一定せんとせば、文體も亦一定せざる可らず、而して此時は言文一致體を獨り適當と爲す、歐米諸國卽ち羅馬字を用ゆる諸國の文、皆此體なれば也

○余曾つて或る新聞紙上に論載せしこと有り、曰く我邦人は既に自國を生活し、又歐米を生活す、一身にして二樣の生活を爲す、他邦人に比して一倍の生産力無かる可らず、何の謂ぞや、曰く吾人既に羽織袴を着し、又フロツクコートを着す、既に煙管を啣み、又パイプを持す、書院付き茶席付きの家屋の一隅カーフエル付きの洋室を設く、其他斯くの如き類枚擧に遑あらず、此事小なるに似て實は然らず、一國の經濟に關する極めて大なるもの有り、五等爵位の大經世家、其れ何ぞ此に慮及せざるや、

邦人は二樣の生活を爲す

○墓地日に月に益々廣がりて、宅地耕地總て生産地を侵すこと極て大なり、東京谷中青山に觀て見る可し、其間歲月の久しき、舊を毀ち新に代へ、相償ふことを得べしと雖も、抑も大勢に於ては增す有りて減ずる無し、余は法案を設けて一切火葬と爲し、各人携へて去りたる餘は骨と灰とを一所に堆積し、每月日を定めて之を海中に投棄せしめんと欲す、其各人祭祀の如きは遺骨を家に置き、且つ寫眞畫若くは油繪を展べ、之れに對して焄蒿悽愴の誠を致せば、以て孝子貞女の情を竭すに於て餘有るに非ずや、何ぞ必ず墓域を以てせん、若し夫れ國家に大功勞有りたる人物の如きは別に碑を建てゝ之を表奬する可なり、斗筲の人にして一々碑に銘するが如きは笑ふ可きの甚き也

燒て粉にして吹散らせ

卜筮、觀相、風角、巫祝

○卜筮、觀相、風角、巫祝及び諸種佛神護符の類、其人事に害し並に人の神智を傷むること極て大なり、此

等徐ろに法を設け、多少の猶豫期を與へて之を禁絶す可し、其他天理教、金光教會等淫祀の屬、皆此一例に依り之を禁絶す可し、

藝妓放つ可し　○藝妓及び一切割烹店の婦女は之を放つ可し、其風俗に害し且傳染病毒を媒介するの恐れ有り、其聲妓の如きは往々躬ら黴毒を製造す、之を傳播するのみに非ず、且つ彼輩其業たる、專ら杯酌に侍し宴興を佑くるに在りて、而して縉紳の徒之を聘する者、初より褻瀆を事として少も敬意を表するを要せず、良家の令孃令夫人に接するに比すれば、自ら恣にして些の愼謹を須ゐざるが故に、自然に令孃令夫人をして、男子との交際外に斥けられざるを得ざらしむ、我邦婦女の交際の趣味を解せざるは、藝妓有りて男子の歡を擅にするが爲め也

○娼妓は余之を保存するを欲す、道德大に進み、今の僞君子皆眞君子と爲り、今の小人皆柳下惠と爲るの日を待ちて、娼妓始て廢す可し、彼れ既に驅黴の設け有り、聲妓の危險なるが如くならず、但娼家建築の方法を一變し、無意の人を誘惑すること無からしむる其れ可なり、遠きに聞ゆる樂器の如き、之を禁ずる其れ可なり

娼妓家の設け本是れ社會に缺陷有り、人心に弱天下、娼妓より必要なるはなし

○娼家の設け本是れ社會に缺陷有り、人心に弱處有るに因り、人情已めんと欲して已む可らざる者有り、夫れ已む可らざる者、天下之れより要なるは莫し、故に彼れ僞君子の徒、囂々其非を唱へ官又深く察せず、所謂自由廢業の事起りたるも、竟に廢絶す可らず、但娼家主人饜く無きの慾に騙られ、諸く無義無殘の手段を設けて娼妓を窘しむるが如きは、其弊宜しく一洗す可し

病の一年半と日記の一年半　○然りと雖も余の癌腫、卽ち一年半は如何の狀を爲す、彼れは徐ろに彼れの寸法を以て進め、故に余も亦余の寸法を以て徐々に進みて余の一年有半を記述しつゝ有り、一の一年半は疾也、余に非ざる也、他の一年半は日記也、是れ余也

○疾病なる一年半、頃日少しく歩を進めたるものの如く、頸頭の塊物漸く大を成し、喉頭極めて緊迫を覺へ、夜間は眠り得るも晝間は安眠すること能はず、其食に對する毎に、或は嚥下すること能はざる可しと思ふこと有るも、實際未だ然らず、雞子二三個、粥二碗、穀二碟、牛瀝一日四合は之を攝取して違ふこと無し、是れ今日猶ほ能く余の一年有半を錄する所以なり

小山久之助君　○七月十三日故五代友厚君の遺子某女、東京より小山久之助君の書翰を齎して來り、且つ面會を乞ふ、余聲全く嗄し談話すること能はずと雖も、小山の書翰を見れば、佛蘭西學に從事し余に面せんと欲すること茲に久しき旨に附き、之を座に引き、强ひて聲を絞りて一二語を交へたり、小山も亦頸頭塊物を發したりと傳聞し、五七日前書を裁して之を問へり、今其書中に曰く、淋巴腫にて橋本醫伯の治術を受け、少しく快に赴けりと、滔々今日の濁流中に在て、之子の如きは純粹愛すべき者、希くは余の疾の如く不治症に非ざることを、

舊門人二十餘人　○是より先余の猶ほ大阪小塚旅店に在るに當り、野村泰亨君書を寄せ來り、舊門人（佛學塾）二十餘人の名姓を書し、楮泉六十餘金を封じて贈り呉れ、曰く、聊か以て肴菓の料に供すと、余諸君の故舊に厚きを喜び、受けて之を納め、余固より常に阿堵物に短なり、今此贈を得て、余が意恰も萬金を獲たるものの如し、

堺市寓居の庭園　○余が堺の寓、庭園小なりと雖も、頗る蒼古隱秀の態有り、樫木一樹七八十年の物、幹五六本立ち、其中一は外皮の如き形を成して、他の幹を半ば包容せり、山石大小數十、皆蒼苔に封ぜられ、地面も亦大率苔を被むり、燈籠四五も亦皆苔を被むらざる莫し、若し柳々州の筆法を以て之を記せば、樹木や石や燈や一切の物を排置し、然る後苔を以て之を包みたるものゝ如し、小盆池有り錦魚數十尾を蓄へり、余毎日吸入を行ひ藥を服し、若しくは一年半を記し、其間時に庭に下り餌を池に投じ、以て樂と爲す、龜有り大さ盆の如し、然れども此物や一種先天的野性にして、絕て人に狎るゝこと無し、時に頭を水面に出すも、跫音を聞けば輒ち沒す、此物竟に濟度すべからず

余が鄕里松魚あり　○堺の地魚類に富み又味美なり、吾邦に在り都て南に面する海の魚は、北に面する海の魚よりも美なり、故に余が鄕里土佐及び中國筑前、博多等の魚は、仙臺、秋田、新潟等に比して竟に勝れりと稱す、此地海濱茅海樓、一力樓等酒樓にして旅店を兼ね旅客

極めて多く、其大阪より來る者夥し、皆鮮魚を味ふが爲め也、魚は則ち鯛、鰕魴其他又蛤蜊の炙尤も美と稱せらる、但恨むらくは松魚無きの一事也、余が鄉里松魚を以て名有り、今や梅霖の候此魚日々市に上ること極めて多く味の美四儔無し、一想する毎に人をして垂涎に堪へざらしむ

余が鄉里楊梅あり

○余が鄉里又楊梅有り、今方さに其候也、楊梅に二種あり、一は朱色にして一は銀色なり、而して其銀の者最甘美、漢土に在ては荔支龍眼肉に亞ぎて尙ばるゝもの實に楊梅とす、葡萄梨柿の屬は輿儓のみ、皁隸のみ、

迂なる哉公債賣出

○桂內閣は、頃日公債を外國市場に賣出さんと欲して、其筋の者をして事情を探索せしめ、應募者無かる可きに窘しむと聞けり、是れ始より爭に莫大の費を糜し、佛國は殆ど國力の半を露國の事業に投じ、獨逸は正に恐慌に惱めり、此の如く歐洲大市場は今方さに資金に短なり、而して我政府が二十七八年以來常に貧に苦しみつゝ有ることは、議會之を暴露し、新聞紙之を夸張し、外人をして竊に疑惧を懷かしむ、是の時に於て公債を賣出さんと欲す、迂も亦甚し、桂內閣果して百年の長計に着眼して、而して之を建つるに必ず巨費を要するに於ては、何ぞ斷然抵當を揭げて財主を挑せざる、金を借るに抵當を入るゝは個人として恥づ可きに非ず、邦國としても亦同樣也、吁是亦從前のものと同じく、無經綸にして唯勢利是れ貪るもの耶

○桂內閣大に貴族院を懼れ衆議院を懼ると聞く、是れ大謬也、桂內閣たる者、唯天下後世に愧ぢざる當今の務に適切なる經綸無きを是れ懼る可きのみ、夫れ大經綸既に立つ、何ぞ貴族院を懼れん、何ぞ衆議院を懼れん、二院にして妄意抗衡するが如き有らば、直ちに天下に呼號し、演說に新聞に以て斯民に訴へんのみ

斯民に訴へんのみ

○國務大臣貴尙せらるゝこと殊に甚し、是れ昔時專制政治の遺弊也、衆議院議員固より大臣たらんことを希ふ、而して貴族院議員も亦爾かり、彼れ何會何派と稱して動もすれば官と抗爭することを好むは、其中心實は國務大臣たらんと欲する也、一言すれば兩院議員俱に勢利の餓鬼也、夫れ榮譽の地何ぞ限らん、大臣以外高等官に論無く、卽ち辯護士、新聞記者、工商業家、何の職業を問はず、力量あり手腕有りて能く功績を擧ぐるに於ては、皆貴尙尊重す可し、國務大臣と爲り何の爲す無く唯利祿是れ貪る、是れ恥づ可きの甚し、何の榮譽か之れ有らん、何の貴尙す可きことか之れ有らん、

榮譽の地何ぞ限らん

○我邦官吏甚だ尊きが如くにして、其實は然らず、是れ繁文の弊の生ずる所以也、何を以て之を言ふ、曰く且つ農商務の一省に就て言はん、既に山林、鑛山、商工等の局を設け各々之が長を置けり、然も山林局長は獨り其局の責に任ずるに非ずして、他の高等官も亦必ず其文書に捺印して以て其責を分つ、是我制たる各局長を猜うて獨り其責に任ぜしめず、卽ち繁文の弊を生ずるも權を各長官に委せず、而して事務爲めに澁滯し日月爲めに曠過し、之れが害を被むる者は人民也、故に曰く我邦官吏尊きが如くにして實は然らずと、此も亦行政刷新中の重なるもの也、

繁文の弊生ずる所以

○是故に凡そ事各局に係るものは其當該局長獨り責に任じ、他の局長は關知せず、乃ち山林の事、商工の事之れが局長たる者意見を出し、次官大臣之を採用せば、直ちに命令を發して可なり、此くの如くするときは今日三月を費す事項も、四五日乃至十日を以て之を辨ずべし、而して局長たる者、益々奮勵して事に從ふや必せり、是れ其人を尊ぶ所以也

官とは何ぞ

○且つ官とは何ぞや、本是れ人民の爲めに設くるものに非ずや、今や乃ち官吏の爲めに設くるものゝ如し、謬れるの甚しと謂ふ可し、人民出願し及び請求すること有るに方り、之を却下する時は宛も過擧有るものを懲すが如く、之を許可する時は宛も恩惠を與ふるものゝ如し、何ぞ其れ理に悖るの甚しきや、彼等元來誰れに賴りて衣食する乎、人民より出る租稅に賴るに非ず乎、乃ち人民の豢養を受けて、以て生活を爲しつゝ有るに非ず乎、凡そ官の物金錢に論勿く、一毫と雖も天より落つるに非ず地より出るに非ず、皆人民の囊中より生ぜしに非ざる莫し、卽ち是れ人民は官吏たる者の第一の主人也、敬せざるを得可けんや、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com